

敦煌本『佛母経』と釈迦金棺出現図について

——関係資料の紹介を中心として——

川崎ミチコ*

1) はじめに

先ず、本稿で論ずるところの『佛母経』について、『敦煌学大辞典』に解説されているものを概略し、更に、拙稿及びその後蒐集した『佛母経』をも含めた中で、『佛母経』の全体像を明らかにしておきたいと思う。

『敦煌学大辞典』（頁732右）には、

佛母経：又の名は、『大般涅槃経佛母品』・『大般涅槃経佛為摩耶夫人説偈品経』という。作者不詳の中国人撰述経典一卷である。この経は、中国人が『摩訶摩耶経』巻下に記されている「佛臨涅槃母子相見」を用いて題材として、中国の伝統的孝道とインド仏教の無常思想を融合させて撰述した経典である。この経典には異本が数種類存在する。そして、それらの異本は4系統に分けることができると考える。

(1) S.5581 (首尾俱全、存47行)・S.3306 (首尾俱全、存34行)・S.2084 (首尾俱全、存30行)・S.1371 (首尾俱全、存32行)・北鳥90 (首残尾全、存27行)：『佛母経』 或いは『大般涅槃経佛母品』という標題である。

(2) 北官97 (首残尾全、存44行)・北霜82 (首残尾全、存44行)・北羽15 (首残尾全、存36行)・北文99 (首残尾全、存31行)・S.6960 (首残尾全、存37行)：『佛母経』 或いは『大般涅槃経佛母品』という標題である。

(3) 北月43 (首残尾全、存49行)：『大般涅槃経佛母品』という標題である。

(4) 北歳11 (首尾俱全、存36行)：『大般涅槃経佛為摩耶夫人説偈品経』と

*東洋大学文学部准教授。

いう標題である。

これら4種類の異本の文字にはかなり差異が存在する。しかし、そこでの題材・構成・思想内容は均しく同様である。その内容は、釈迦牟尼が涅槃に入った時、急ぎ憂波離を忉利天へ遣わし、その母親である摩耶夫人に知らせた。摩耶夫人はこの知らせが来るより前に、すでに六悪夢を見たことにより、悪い知らせのあることを認識し、知らせを聞いて地上へ降下していった。釈迦牟尼は既に棺に入れられており、会うことはかなわなかった。摩耶夫人は、棺に纏わりつくようにその周りを廻り、哀しみのあまり声をあげて泣いた。すると、釈迦は、自ら金棺から出てきて、母摩耶夫人のために無常偈を説いた。母摩耶夫人はそれを嬉しく思い忉利天へ戻って行かれた。その時、天地は震動し、涙は雨降る如く流れた。諸本の区別は、六種の悪夢の記述、細かい描写及び釈迦が説くところの偈頌の部分が重要であった。歴代の経録は均しく収載しておらず、歴代の大蔵経も亦た均しく収載していない。ただ後に日本で刊行された『大正新修大蔵経』第85巻には収められている。しかし、わずかに一種の異本であり、この異本S.2084は、原巻には残缺があるが、他の異本に依り補足することが可能である。

このあとには、P.2055巻末の題記について14行にわたり解説されている(佛母経の解説は全部で40行である)。このP.2055巻末題記については拙稿「敦煌文献に見る人々の《死後の世界》への思いについて—『仏説地藏菩薩経』・『仏説十王経』・『津藝193+岡44+伯2055』写本紹介を中心として—」(『東洋大学中国哲学文学科紀要』・第18号・2010年3月)を参照していたくこととして、ここでは省くこととする。

次に、拙稿「『佛母経』について」(『東洋学論叢』・第12号・1987年3月)では、

佛母経とは如何なる經典であろうか。既出の結論を先に言うならば、現存可見の經典は、敦煌文書にのみその名称を見出すのであり、『大正新修大

藏経』第85巻古逸部にその録文が収載されているだけである。従って、その全文はあまり明確なものではなかった。今、『仏書解説辞典』の佛母経についての記載をあげてみよう。

佛母経 ②1巻 ③存・大正85・1463No.2919・⑥スタイン蒐集敦煌写本の一(A)。尾缺の断片(B)であるが、偽経と認められるべきもので、現存の部分(C)には仏の入涅槃に際し、憂波離昇天して佛母に告ぐ、佛母夢告の譚あり、佛母沙羅樹間に下り、号哭して半偈の法をも留めざるやと嘆く、仏、金棺の中より出で母の為に諸行無常偈を説くとしてある。⑨敦煌本(大英博物館S.2084)

以上が『仏書解説辞典』の記述であるが、この説明には、いくつかの補足をせねばならない点がある。しかし、それは此の辞典が上梓された当時、資料とすべき敦煌出土資料が現在程自由に入手利用出来なかったということからして止むを得ない事情にいずれのものであろう。

まず(A)について述べておく。現在可見のものは、スタイン将来の斯2084だけではなく、次の通りである。斯1371・斯3306・斯5177・斯5576・斯5581・斯6960・伯4576・伯2055・散279・散391。これらの敦煌写本については別章で詳細に触れることにする。

次に(B)についてであるが、該当の斯2084は「尾缺の断片」打破なく、首題は「佛母経」、尾題が「大般涅槃経佛母経」という首尾完備した完全写本である。従って、(C)の表現は適切なものとは言えないと考える。

以上が佛母経についての従来知識であった。今稿に於いては、幾つかの資料を用いて佛母経の概要を些かでも明白にしたいと考えている。

とあるのであるが、拙稿が出てから本年2018年で31年目となる。この間の資料影印本の出版や、夥しい数の研究書の出版に鑑みても、更に補足すべき点が多くある。

そこで、本稿では、その「補足」に重点を置いて資料を紹介することを主たる目的とすることにする。

2) 『佛母經』 について

さて、次に『佛母經』という經典について説明することにする。

既に、「はじめに」のところで、『仏書解説辞典』や『敦煌学大辞典』に掲載されている『仏母經』についての説明を紹介したが、いずれもその記述がなされてから、かなりの時間を経ており、更に、その後、目録や影印本の普及に依り敦煌文献に対する情報量が増えたこともあり、今回、此の章に於いて加筆訂正をすることとした。

先ず、現在、敦煌写本の中で、『佛母經』ということのできる写本を以下列記することにする。

S.はスタイン将来敦煌写本・P.はペリオ将来敦煌写本・北は中国国家図書館所蔵敦煌写本であり、()内の漢字は、陳垣の『敦煌劫餘録』の整理に用いられた千字文である。孟は、ロシア・セントペテルブルグ研究所所蔵敦煌文書のメニシコフ目録を指す。秘笈は、日本・武田財団杏雨書屋所蔵の敦煌写本を指す。

- (1) S.0153V. : 佛母經の三文字のみ。
- (2) S.1371 : 首題は佛母經・尾題は佛母經一卷
- (3) S.2084a : 首題は佛母經・尾題は大般涅槃經佛母經
- (4) S.3306 : 首題は佛母經・尾題は佛母經一卷
- (5) S.5215 : 首缺・尾題は大般涅槃經佛母品
- (6) S.5581c : 首題は仏説佛母經一卷・尾題は仏説佛母經一卷
- (7) S.5677b : 首題は佛母經一卷
- (8) S.5865 : 首題は大般涅槃經佛母品第
- (9) S.6367a : 首題は大般涅槃經佛母品
- (10) S.6960a : 首缺・尾題は仏説佛母經
- (11) P.2055b : 首題は大般涅槃摩耶夫人品經・尾題は佛母經

- (12) P.2160：首缺・尾題は摩訶摩耶經卷上
- (13) P.3136a：佛母經・經の前に白描の佛母像あり。
- (14) P.3919aa：首尾俱全。大般涅槃經佛母品
- (15) P.4576：尾題は佛母經一卷
- (16) P.4654：佛母經
- (17) P.4799：佛母經，殘存下半截6行。
- (18) 北6621（雨90）尾題は仏説摩耶經一卷
- (19) 北6622（夜10）尾題は大般涅槃經佛母品
- (20) 北6623（字65）尾題は仏説摩耶經一卷
- (21) 北6624（官97）尾題は大般涅槃經佛母品
- (22) 北6625（霜82）尾題は大般涅槃經佛母品
- (23) 北6626（羽15）尾題は佛母經
- (24) 北6627（文99）尾題は仏説佛母經
- (25) 北6628（月43）尾題は大般涅槃經佛母品
- (26) 北6629（歳11）首題は大般涅槃經仏為摩耶夫人説偈品經
- (27) 北6630（鳥90）尾題は大般涅槃經佛母品
- (28) 北8211（霜81）首題は佛母經一卷
- (29) 甘肅省博物館所藏敦煌写本：甘博96
- (30) 上海博物館所藏敦煌写本：上博48-14
- (31) 孟1295：首存尾缺・首題は大般涅槃經佛母品
- (32) 孟1296：首存尾缺・首題は大般涅槃經佛母品
- (33) 孟1297：首缺尾存・尾題は佛母經一卷・本写本は孟1295・孟1296とは、その内容に大きな差異がある。
- (34) 日本・武田財団杏雨書屋所藏敦煌写本：秘笈93（李・散0392）佛母經
- (35) 日本・武田財団杏雨書屋所藏敦煌写本：秘笈226（李・散0392）佛母經
- (36) 日本・武田財団杏雨書屋所藏敦煌写本：秘笈293（李・散0454）大般涅槃經佛母品

(37) 『正倉院文書』に記録されている「佛母經」：目録上での確認ではあるが、第19卷No51に「佛母經」という經典名が記述されている。

以上合わせて37件の「佛母經」写本が存在するということである。

また、『敦煌学大辞典』の記載のように、『佛母經』写本をその内容構成等により、四分類することが可能であり、それを実証する形で『藏外仏教文献』第一輯（頁374-391）に李際寧氏が整理（校勘・分類）した『佛母經』では、四系統のものをそれぞれ、

[録文一]：大般涅槃摩耶夫人品經・京安国寺大徳安法師訳、

[録文二]：大般涅槃經佛母品、

[録文三]：大般涅槃經佛母品一これは、[録文二]の記述内容と異なる部分がある。

[録文四]：大般涅槃經仏為摩耶夫人説偈品經

というように分けて、それぞれに該当する写本を用いて、校勘を行ない、定本を作成している。その内容については、『藏外仏教文献』第一輯を参照していただきたい。

3) 佛入涅槃の事実を忉利天の佛母摩耶夫人へ告知のために出かけた人物について

さて、ここでは、『佛母經』・『摩訶摩耶經』・『伯2055』・『今昔物語』を用いてそれぞれの記述から、「佛入涅槃」前後の情景を思い起こしてみようと思う。筆者はかつて、これら四資料の該当部分を、「佛入涅槃」「天上界での予知夢」「佛母摩耶への告知」「摩耶夫人の降下」「仏金棺出現為摩耶夫人説偈」「母子相見」「佛母帰忉利天」等々九つの場面に分けて論じたことがある。そこで本稿においても、その九分類を利用することにした。

先ず、第一の場面では、釈迦入涅槃時のことについて述べている。

『摩訶摩耶經』と『今昔物語』にはそれぞれ直接対応する部分は存在しないが、『佛母經』では、阿難と迦葉が釈迦のそばにはおらず、そのため「汝とは会えなかった」との伝言が残されている。又、『伯2055』では、阿難と迦葉が傍にいたか否かは明らかではないのであるが、釈迦はこの二人に対して、阿難には「一切經書」、迦葉には「戒律文章」を残している。まさに「遺品」である。その後については、『佛母經』、『伯2055』共に、憂波離に対して、忉利天上に居る母に「釈迦入涅槃」の事実を告げ、「母の降下」と「三宝への礼敬」を欲している旨を伝えるようにと依頼している。

第二の場面は、天上界に於ける佛母摩耶夫人の様子が描かれている。『摩訶摩耶經』では、天上界に五大悪夢による五衰相が現れたと記され、『佛母經』では六種悪夢、『伯2055』では六種不祥之夢と記されている。しかし、『今昔物語』には、この場面にも対応する記述がない。

次に、三資料の摩耶夫人の見た、釈迦入滅の予兆として描かれている「悪夢」について対照表を作成してみた。

	『摩訶摩耶經』	『佛母經』	『伯 2055』
一者	須弥山崩四海水渴	須弥山崩	猛火来烧我心
二者	有諸羅刹手執利刀 競挑一切衆生之眼時 有黒風吹諸羅刹皆悉 奔馳歸於雪山	四海枯竭	兩乳自然流出
三者	欲色界諸天忽失宝 冠自絶瓔珞不安本座 身無光明猶如聚墨	五月降霜	須弥山崩
四者	如意珠王在高幢上 恒雨珍宝周給一切有 四毒龍口中吐火吹倒 彼幢吸如意珠猛疾惡 風吹没深淵	宝幢截折幡花崩倒	大海枯竭

五者	有五師子從空來下 嚙摩訶摩耶乳入於左 脇身心疼痛如被刀劍	大火來燒我身	摩竭大魚吞噉衆生
六者	該當記述無し	兩乳自然流出	夜叉羅刹吸人精氣

以上が、三資料における「悪夢」一覧である。三種に共通する悪夢は、「須弥山崩」と「四海（伯2055では大海）枯渴」である。

第三の場面では、『佛母経』と『伯2055』に、憂波離が忉利天上に佛母摩耶夫人を訪ね、「佛入涅槃」を伝達した事が記述されている。又、『摩訶摩耶経』では、五大悪夢を見た摩耶夫人が「我子釈迦」の「入涅槃」を予知したという記述になっている。『今昔物語』はこの場面にも対応する記述はない。

第四の場面では、忉利天上の佛母摩耶夫人に「釈迦入涅槃」を伝達した人物の名前が記述されている。

『摩訶摩耶経』では「阿那律」、『佛母経』と『伯2055』では「憂波離」、『今昔物語』では「阿難」ということになっている。

第五の場面では、忉利天上で釈迦の入滅を聞いた、仏母摩耶夫人のショック状態の激しさと、氣絶した摩耶夫人を介抱する天女の様子が描かれている。

第六の場面では、『摩訶摩耶経』・『佛母経』・『伯2055』・『今昔物語』全てにおいて、仏母摩耶夫人が地上の釈迦のもとへ降臨したところ、既に殯葬は終わっており、仏母は我子釈迦が生前に用いていた僧衣・鉢盂・錫杖のみを眼にするだけであったと記されている。

第七の場面では、仏母摩耶夫人が、母として我子釈迦の入滅を哀しみ嘆く情景が描かれている。

『摩訶摩耶経』では、右手で遺品をとり、左手で頭を打ち、身を地に投げ出す様子は、太山が崩れるようであるといい、摩耶夫人だけではなく、八部・四衆皆嘆き悲しみ落涙し、その涙は帝釈の力により河の流れになっ

たと記す。

『佛母經』では、十大弟子も号泣し、佛母摩耶夫人は棺の周りを三度回り、我子釈迦に対して、「慈子よ、慈子よ、我母の為に半偈之法を留めよ」と懇願したと記す。

『伯2055』では、仏母摩耶夫人が棺の周りを三度回り、我子釈迦に対して、「悉達よ、悉達よ、母の為に半句章偈を留めよ」と言い、さらに「悉達よ、痛くはないかい？ 苦しくはないかい？」と尋ねるのである。この部分は他本には無く、かなり俗人の会話となっているように思える部分である。

『今昔物語』では、「私は過去無量劫よりずっと、あなた（我子釈迦）と母子となっていて、未だかつて離れることはなかったのに、今あなたが入滅してしまい、もう会うこともできない、悲しいことである」と記す。

第八の場面では、佛母摩耶夫人の悲嘆号泣を聞いた釈迦が、納棺されていた「棺」の中から出て来て、母の為に説法するという情景が記されている。まさに、「釈迦金棺出現為母説法」の場面である。

『摩訶摩耶經』では、

爾時世尊以大神力故令諸棺蓋皆自開發便從棺中合掌而起如師子王初出窟時
奮迅之勢身毛孔中放千光明一一光明有千化仏悉皆合掌向摩訶摩耶以梵軟音
問訊母言遠屈來下此閻浮提諸行法爾願勿啼泣即便為母而説偈言

一切福田中	仏福田為最
一切諸女中	玉女宝為最
今我所生母	超勝無倫比
能生於三世	仏法僧之宝
故我從棺起	合掌歡喜歡
用報所生恩	示我孝恋情
諸仏雖滅度	法僧宝常住
願母莫憂愁	諦觀無上行

とあり、『仏母経』では、

爾時世尊聞母喚声以神力故金棺銀槨蹙然自開妙兜羅錦颯然而下遂涌身在七
多羅樹間此磨黄金色身坐宝蓮華為母說法喚言慈母慈母一切衆生会有崩絶一
切藁林会有摧折一切江河会有枯渴母子恩愛会有離別説斯語已還復没矣

とあり、『今昔物語』では、

其の時に、仏、神力を以て故に棺の蓋を自然に令開（ひらかしめ）て棺の
中より起き出給て掌を合せて摩耶夫人に向き給ふ。御身の毛の孔より千の
光明を放ち給ふ。其光の中に千の化仏坐し給ふ。仏、梵声を出して母に問
て宣はく諸の行は皆如此し。願くは我が滅度しぬる事を歎き悲て泣啼し給
ふ事无かれと。

とある。

以上の記述中より、注目したい点が二つある。一つは、釈迦が母の為に
説いたとされる「偈」についてである。

『佛母経』では、「世間苦空・諸行無常・是生滅法・消滅滅已・寂滅為樂」
となっており、『伯2055』では、「一切衆生会有崩絶・一切藁林会有摧折・
一切江河会有枯渴・母子恩愛会有離別」となっている。

又、この四句と同様のもののうち三句が、その順番は異なっているが、『仏
母経』の巻末にある。「一切江河会有枯渴・一切藁林会有摧折・一切恩愛
会有離別」である。

『仏母経』や『伯2055』とは異なり、『摩訶摩耶経』では、釈迦は棺から
出た後二度偈を説いたとされ、『仏母経』の説偈と同一内容のものは、二
度目の説偈の末四句「一切行無常・在是生滅法・生滅既滅已・寂滅為最樂」
である。

『今昔物語』では、「諸行皆此くの如し。我滅度を歎き悲しみ泣啼なさら

ないで下さい。」と記されている。

二つ目は、「棺」の中から出現した時の状況、つまり釈迦の状態・様子である。

『摩訶摩耶経』では、釈迦は大神力を用いて棺の蓋を開け、棺の中から合掌下姿で起き上がり、獅子奮迅の勢いで棺の外へ出てきた。その身体中の毛孔からは、沢山の光明が放たれ、其の一つ一つの光明には沢山の化仏が居て、其の化仏たちは全てが摩耶夫人に対して合掌しているという。

『仏母経』では、母親の声を聴いた釈迦が、自分で金棺を開け、千葉蓮華台の上に座り、母の為に説法したという。

『伯2055』では、母の声を聴いた釈迦が神力を使って金棺銀槨を開けて、黄金色に輝いた身に宝蓮華の上に座り、母の為に説法したという。

『今昔物語』では、仏が神力を使って、棺の蓋を自然に開かせ、棺の中から起き上がり、合掌して摩耶夫人と向かい合った。その身体中の毛孔からは沢山の光明が放たれ、その光明の中には沢山の化仏が坐しているという。

以上あげた点を、「金棺出現為母説法図」や「涅槃図」などを見るときの、「物差し」として用いることにより、各々が根拠としている「経典」を理解することができるのではないだろうか。

第九の場面は、我子釈迦の説法を聞いた佛母摩耶が、我子に会えたことを喜び、更に、自分の為に説法してくれたことを心から飲んで忉利天へ戻るとことが記されている。

『摩訶摩耶経』では、釈迦の母摩耶夫人への説偈は終わった後、阿難が釈迦に対して「垂涙嗚咽、強自抑忍。即便合掌而白仏言。後世衆生必當問我。世尊臨欲般涅槃時。復何所説云何答之」と尋ね、これに対して釈迦は、「仏告阿難。汝當答言。世尊已入般涅槃後。摩訶摩耶從天來下至金棺所。爾時如來為後不孝諸衆生故。從金棺出如師子王奮迅之勢。身毛孔中放千光明。一一光明有千化仏。悉皆合掌向摩訶摩耶。并又説於如上諸偈」と答え、更に阿難が「當何名此經。云何奉持」と尋ねると、釈迦は阿難に、「我於

昔日切利天上為母說。及摩訶摩耶夫人自有所說。今復在此母子相見。汝可為後世諸衆生輩。次第演說此經。名曰摩訶摩耶經。又名仏昇切利天為母說法經。又名仏臨涅槃母子相見經。如是奉持」と答え、爾時世尊此語已。与母辭別。そして、五言十句の偈を残したのである。

この十句の中の第七句目から十句目の四句が、先に記した『仏母經』の中の偈と共通の内容を有するのである。

ここで取り上げた阿難と釈迦との問答は、『仏母經』にも『伯2055』にもない部分である。

この対話の中で注目すべき点は、釈迦が棺から出てきたのは、単に母に再開し、母の為に説偈するということが目的であったわけではなく、釈迦自らが阿難に語ったように、「後不孝諸衆生」の為に、既に納棺されていた棺の中から出てきたのであるということである。

もう一つ、釈迦自らが經典に命名したという記述も注目すべきであろう。『摩訶摩耶經』といい、『仏昇切利天為母說法經』といい、『仏臨涅槃母子相見經』というのだという記述である。

更に、『摩訶摩耶經』では、先に述べた五言十句の偈の後、棺の蓋は閉められ、大千世界が震動し、摩訶摩耶夫人はじめ全てが悲泣懊惱する様子が記され、更に摩訶摩耶夫人が我子釈迦の入滅時の様子を阿難に尋ねる記述がある。

『仏母經』『伯2055』は共に仏母摩耶が歡喜の氣持を持って、切利天上へ戻っていったと記されており、『今昔物語』では、阿難との問答については、「其の時に、阿難、仏の如此く棺より起き出給へるを見て仏に曰して言さく、「若し後世の衆生有りて、「仏、涅槃に入り給ふ時は何事をか説き給ひし」と問ふ事有らば、何が可答き」と。仏、阿難に告て宣はく、「汝が可答き様は、「仏、涅槃に入り給ひし時、摩耶夫人、切利天より下り奉り給ひしに、仏、金の棺より起き出給て、掌を合せて母に向て、母の為及び後世の衆生の為に偈を説き宣ひて」と可語し」。此れを仏臨母子相見經と名付く。此の事を説き畢り給て後、母子別れ給ひにけり。其の時に、棺の蓋、本の如

く被覆にけりとなむ語り伝へたとや」と記述されている。

以上、三種類の資料を中心として、釈迦と母摩耶夫人との関係を見てきたが、この「母子」の関係は、中国古来より継続されてきた、「孝」を最高道徳とする儒教的思惟そのものであるといえよう。そして、それらは、「孝」観念そのものを反映した中国人社会にとって、何のわだかまりもなく、受け入れやすい「仏教経典」でもあったのであろう。

『摩訶摩耶経』の記述の中には、既にふれたように、「後の不孝の衆生の為にこの『摩訶摩耶経』があるのである」という釈迦の阿難への言葉があるほどである。

『仏母経』や『伯2055』には、更に「俗人」的な発想や言い回しが見受けられる。

筆者は、本稿で用いた三種類の資料、『摩訶摩耶経』・『仏母経』・『伯2055』が全て中国で撰述されたものであると考えている（『摩訶摩耶経』に関しては、『大正新修大蔵経』巻55巻塗収載されている歴代の「仏教経典目録」：『出三蔵記集』・『歴代三宝紀』・法経等『衆経目録』・彦棕等『衆経目録』・静泰等『衆経目録』・『大唐内典録』・『統大唐内典録』・『古今訳経図紀』・『大周刊定衆経目録』・『開元釈教録』・『開元釈教録略出』・『貞元新定釈教目録』・『東域伝燈目録』等々を参照のこと）。更に、これらが、作られたり、書写されたりしている点から見た時、敦煌文献中では、『仏母経』写本は三十数点あるが、『摩訶摩耶経』という名の写本は片手にも及ばないのである。しかし、それとは反対に、『正倉院文書』中では、『仏母経』は一点であるが、『摩訶摩耶経』は四十点を超えるという状況である。これは何を意味するのであろうか。

敦煌文献のことを考えてみるならば、中国の歴代の様々な「仏教経典目録」の中にその記録がある『摩訶摩耶経』ではあるが、敦煌という限定された地域においては、『摩訶摩耶経』よりはるかに具体性を帯びた『佛母経』のほうが、受け入れられやすかったのであろう。それは、敦煌という地域において、日常的に「孝」を最高道徳と考え、生前の孝倫理だけではなく、

死後の孝をも重要と考えることが常態化していた結果なのではないだろうか。遺されている『十王経』・『父母恩重経』『十恩徳』等々の写本類からも理解できることと思うのである。

4) おわりに

今回本稿で言わんとしたことは、以下の二点である。

- (1) 『仏母経』という経典は、その内容から四つの系統に分けることができるが、その言わんとする内容は同様である。そして、「佛入涅槃」を忉利天の仏母摩耶夫人に知らせに行く人物は「憂波離」であり、当然地上へ降下するときの先導者も同人である。本稿における対照によって分かるように、『摩訶摩耶経』では「阿那律」であり、『今昔物語』では「阿難」である。このように人物を特定しておくということは、全てを明らかにすることができるわけではないが、如何なる経典を拠り所として描かれた「涅槃図」であるのか、将又、「釈迦八相図」であるのかを知りうるができるわけである。

例えば、奈良・宗祐寺の涅槃図では、その涅槃図の中に「波離昇忉利天報告摩耶」という短冊形による記述があるという（中野玄三『涅槃図』至文堂・日本の美術268・1968・頁37）。又同書頁57には、京都・興聖寺の涅槃図にも短冊形の墨書で忉利天から高下して来る佛母摩耶夫人と侍女を先導する人物を「阿那律」としているという。

- (2) 『正倉院文書』の中に『仏母経』を書写したものがあるということをもとの様にとらえればよいのであろうか。『摩訶摩耶経』に関しては、『尾張資料七寺一切経目録』（七寺保存会・1968）には二点、『上

越教育大学所蔵黄槩鐵眼版一切経目録』(上越教育大学附属図書館・1988)には一点、『正倉院文書』には四十一一点(別に『摩訶摩耶経義疏』は二点)、『正倉院文書』に四十一一点収載というのは些か多すぎるのではないか思うと同時に、孝観念中心とする儒教的仏教について考えてみたいと思っている。

The Dunhuang Manuscript *Fomujing* and the “Shaka Rising from the Gold Coffin” Scroll: Focusing on an Introduction of Related Materials

KAWASAKI Michiko

First, this essay introduces the hand-copied Dunhuang manuscript *Fomujing* 佛母經, describing the design and the transcription details (differences between scrolled and book-bound versions; whether the front and rear sections are both included). Secondly, it carries out a comparison of the written contents in the *Fomujing* and the second fascicle of the two-fascicle *Foshuo mohe moye jing* 佛說摩訶摩耶經 (contained in vol. 12 of Taishō Shinshū Daizōkyō). Moreover, the essay shows the necessity of considering the idea of filial piety 孝, which can be seen in these two texts.

川崎ミチコ氏の発表論文に対するコメント

金志琰*著・佐藤厚**訳

川崎先生（以下筆者）の「敦煌本『仏母経』と釈迦金棺出現図について」は、これまで筆者が行ってきた『仏母経』研究に、資料を補充して論ずるという性格の論文で、敦煌学の『仏母経』研究に新たな知見を加える意義を持つものと考えます。

まず史料研究の面で、敦煌学辞典に含まれていなかった資料を整理して紹介してくださった点は、敦煌本の『仏母経』研究のために必須かつ重要な基礎研究と考えられ、その貢献に感謝いたします。内容面で、筆者は『仏母経』のストーリー—釈迦の入滅の事実を忉利天の摩耶夫人に知らせ、摩耶夫人が息子の死に対するショックで地上に降りて来ると、釈迦が棺から出て諸法無常を説く偈によって母を安らかに忉利天に帰還させる話—の細部事項が写本によってどのような違いを示すのかを論じ、このような相違点に基づき、現存する釈迦の金棺出現関連の図像の所依經典を確定することができますと指摘しています。

筆者の研究は、忠実な文献学研究の典型を示すものと考えられ、各写本の違いを詳細に分析したことに対して敬意を表します。これは文献学研究が図像学および美術史研究にどのように寄与できるのかを示す例と考えられます。ただ、結論的に母子関係を強調した『仏母経』の話が、「中国で持続した、孝を最高道徳とする儒教的思惟から始まったもの」とする洞察は、文献分析に比べて論証的というよりは直観的なものと思われませんが、中国学の専攻者として十分に納得できる結論であると考えます。

私は実際のところ、敦煌学については自分の専門分野と関連した浅い知

* 김지현 (キム・ジヒョン)。ソウル大学校人文学部教授。

** 専修大学ネットワーク情報学部特任教授。

識をもっているに過ぎず、『仏母経』については全く門外漢であるので論評を引き受けることについて申し訳なく思います。ただ、せっかくの機会ですので門外漢の立場から、いくつか気になった点を質問することで論評に代えたいと思います。

まず最初に、私と同様、敦煌学に対して門外漢な読者のために、敦煌撰述の仏教經典に現れた死後の世界観や宗教観などに対して概説的な説明があればよかったですと思いました。

また、あまりに基礎的な質問で恐縮ですが、『摩訶摩耶経』はインドで作られた仏典の漢訳經典であり（5-6世紀）、『仏母経』は中国で作られた經典であるということは当たっているでしょうか？僧祐の『出三蔵記集』では、『摩訶摩耶経』の翻訳が誰によってなされたものかわからない[失訳]となっているようですが、これをインドの撰述と取り扱うのは仏教学界の定説なのか、知りたいと思います。

原著と変形の問題は仏教学だけの問題ではありませんが、仏教学でインド由来の經典とそれ以外の經典を扱うとき特別な区別を設けているのでしょうか？すなわち、『摩訶摩耶経』は固定したインドの観念を示すものであり、『仏母経』はその派生と変奏になったということでしょうか、『摩訶摩耶経』が本当にこのような観点から議論されることが可能なテキストなのでしょうか？実際、すべての漢訳經典には翻訳の過程で中国的観念が入りこむしかなないのであり、インド由来の經典といっても特定の時期の特定の地域の状況を反映し、継続して生成され変化するテキストと見て分析しなければならないのではないかという考えが出てきます。

筆者の結論で、『仏母経』の母子相逢の場面の強調が中国の孝観念から始まるものであるとおっしゃいましたが、正直なところ儒教的観点で、死んだ息子が「世の中は苦であり、すべてのものが無常であり、寂滅になり平安である」と悟らせるのが母に死後の孝を尽くすことになるのか疑問のように思われます。すべてが孝の延長であれば、道教の場合、身体の不老不死を標榜するわけですが、そうすると死により母親を悲しませることは

なくなり、道教の不死思想は根本的に孝觀念の延長なのかという質問を投げかけることもできるという思いも浮かび、これはこれで興味深いのですが、より根本的な問題として、これらの経典がなぜ「母」に焦点を当てたのか、疑問に思いました。

すでに筆者が研究された部分であるかもしれませんが、これらの経典がなぜ摩耶夫人の観点から書かれたのかに対する見解を伺いたいと思います。私の母を主題として経典が書かれたということは、母を思う息子の立場よりは、息子を思う母の立場を重視したものではないでしょうか？もし釈迦の出棺と説法が母に対する孝であるとみれば、息子の死を悲しんで天上から地下へ降りてきた母は、母が子供に尽くすべき慈愛の徳目を強調したものとみることができようかと思えます（実際、天上界にいる母が息子の涅槃に悲しむという設定も、よく理解できません。天上界で会うことができると思われるのに？）。これと関連して、インド仏教と敦煌仏教の家族単位における母親の役割がどのようなものであったか、『摩訶摩耶経』や『仏母経』成立の背景に女性信徒たちの問題が深く関連していたのではないか、加えて東アジア仏教において母の役割と場所はどこにあるのか、このような質問を投げかけなければならないのではないか、そのように考えます。

これと関連した質問であるかわかりませんが、写本の流布と関連して、中国側には『摩訶摩耶経』写本が少なく『仏母経』写本が多いが、日本の場合は反対に『仏母経』が少なく『摩訶摩耶経』が多いと述べておられます。その理由について、『摩訶摩耶経』に比べて『仏母経』が、より具体性を帯びているからであり、孝を最高徳目とする中国の敦煌地域で生前の孝倫理だけでなく、死後の孝も重視していたためであると述べておられます。ここで述べられた『仏母経』の具体性とはどのようなものか、説明を加えていただけたらと思います。そして中国と日本の孝觀念の違いがあるならば、どのようなものがあるのでしょうか。孝觀念が写本の流行に影響を与えたものであれば、日本に入った『仏母経』は、中国から直輸入された

のか、でなければ朝鮮半島を経たものなのか、もしそうならば三国時代や統一新羅の仏教にも、このような違いがあるのか気になりました。

最後に、中国の敦煌地域は実際、中国本土に対して周辺地域であり、中央アジアの多様な習俗と観念が互いに出会う交差文化地域（cross-cultural region）といえるでしょう。この地域における『仏母経』の成立に、中国の外的な要因の影響はなかったのか、知りたいと思います。

以上、不足ではありますが、論評を終えたいと思います。

金志玟氏のコメントに対する回答

川崎ミチコ*

まず最初に、お忙しい中、拙稿を丹念にお読み下さり、また、有益な指摘をしていただいた金志玟先生に心から感謝の意を表したいと存じます。

さて、金先生はコメントの中で発表者に対していくつかの疑問を提起されておりますので、以下、順を追って、先生のご質問に簡潔にお答え致したいと存じます。

1) 「敦煌撰述の仏教經典に現れた死後の世界観や宗教観などに対して概説的な説明があればよかった」という指摘については、その通りであったと思います。そこで、少しだけ説明させていただくことにいたします。

まず、金先生のおっしゃる「敦煌撰述」という言葉を、「敦煌で書写された」という意味で「敦煌写本」と読み替えたうえでですが、敦煌写本の中で死後世界観を表す代表的なものとしては、『仏説十王經』をあげることができると思います。この經典は、『仏説閻羅王授記四衆逆修生七齋功德經』・『仏説閻羅王授記令四衆逆修生七齋功德往生浄土經』・『仏説閻羅王經』・『閻羅王受記經』などと称されており、更に、十殿十王の絵図が付されたものも存在いたします。

2) 次に『摩訶摩耶經』と『仏母經』についてですが、発表者は、両者共に中国で撰述されたものだと考えております。つまり、疑經だと思っております。『摩訶摩耶經』につきましては、歴代の仏教經典目録の中でも、「曇景訳」とされていたり、「失訳」とされていたり、「偽疑經典」とされていたり致します。又、その記述内容・表記の点からも、『仏母經』と同

*東洋大学文学部准教授。

様に中国人の手による撰述であろうと考えております。従って、「インド撰述」の仏教經典の漢訳經典とはならないと考えます。

3) 「仏教学でインド由来の經典とそれ以外の經典を扱うとき特別な区別を設けているのか」という質問については、仏教学の専門家ではありませんので、私個人の対応の仕方について述べさせていただきます。

インド撰述經典つまり真經と非インド撰述經典つまり疑經とを扱うときに、「特別な区分」（私が、具体的な意味を理解できていないかもしれませんが）を設ける必要はないと考えております。『摩訶摩耶經』のある部分は、真經の中のある經典と共通する部分があり、ある部分は中国の孝觀念そのものの記述であり云々というように、該当部分を明確にし、その上で、各々の部分について検討していくことにしております。

また、私は、『摩訶摩耶經』を偽疑經典として考えておりますので、固定的インドの觀念が提示されたものとは考えておりません。従って、『佛母經』が「派生」し「変奏」したものとも思っておりません。

4) 「儒教的觀點で、死んだ息子が「世の中は苦であり、すべてのものが無常であり、寂滅になり平安である」と悟らせるのが母に死後の孝を尽くすことになるのか疑問」だというご指摘については、『仏説父母恩重經』や『十恩徳』には、「子」の側からの父母、特に母に対する「恩愛」への感謝の思いがあり、それを「孝」と認識しております。道端良秀著『唐代仏教史の研究』（1957第1刷・1967第2刷、法蔵館）頁271～334・『中国仏教思想史の研究～中国民衆の仏教受容～』（1979・平楽寺書店）頁3～17・頁86～92などをご参照ください。

5) 「これらの經典がなぜ摩耶夫人の觀點から書かれたのか」、あるいは、「『摩訶摩耶經』や『佛母經』成立の背景に女性信徒たちの問題が深く関連していたのではないか」という問題提起については、天上界のことや母親

の役割、女性信徒などを取り上げる以前の問題として、「儒教的仏教」や「道教的仏教」という考え方によって仏教を受容し、民衆化させていった歴史の経緯を見なくてははいけないと考えます。これについては、4)で提示いたしました、道端先生の両著をご参照下さい。

6) 金先生は、発表者が「中国側には『摩訶摩耶經』写本が少なく『仏母經』写本が多いが、日本の場合は反対に『仏母經』が少なく『摩訶摩耶經』が多い」とし、その理由として、「『摩訶摩耶經』に比べて『仏母經』が、より具体性を帯びているからであり、孝を最高徳目とする中国の敦煌地域で生前の孝倫理だけでなく、死後の孝も重視していたため」と指摘していると述べた上で、いくつかの質問を提示されておられますが、ここの「中国側には」は「敦煌写本には」の、「日本の場合は」は「正倉院文書の目録には」の誤りです。更にその理由についても、発表者はそのようなことを述べたつもりはございません。あるいは翻訳に問題があるのでしょうか。

以上、簡単ではございますが、金先生のご質問に回答させて頂きました。充分ではございませんが、諸般の事情からご容赦頂きたいと存じます。最後に、コメンテーターの金志玖先生、ならびに、このような貴重な機会を与えて頂いた金剛大学校の関係者の方々に、心からの感謝の意を表して私の回答を終わりたいと思います。